
ウレハ

いみたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウレハ

【Nコード】

N7681Z

【作者名】

いみたん

【あらすじ】

クリスマス夜の夜、真紀は逃げるように地元へと帰郷する。母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

ステージに立った。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、

「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」
と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は唖然とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなった。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追ってきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるように会場を去った。

『第一部』プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。

多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

『第一部』プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都会から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気押し払うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぼつりと、取り残されたように女は座っていた。

化粧や服装がパツとしすぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれってクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止まると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があったの？ あ　私が帰ってきたからだ」

と自嘲した。

辺りを見て、目の前にあった空席表示のタクシーに乗り込んだ。

「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引っ張っている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行っても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼったい前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだった」

「だからこうして、打ち明けてるんでしょ」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張っている。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべて、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いったあ」

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなかったね」

扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほら！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打った。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。グラウンドの端にはテニスコートがあつて、ネットが張られていた。

女は体を抱くようにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなし……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あつたかな？」

と、女は言つて歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振つて覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの！　その人、ここでライブしてるんですけど、見に来ませんか？」

女は訝しそくに、階段上の踊り場を見つめて、

「その人つて私だよね？」

と、言つて、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで！」

と言つて、サンタクロースの格好をした、少女は笑つた。

「ちよつと待つてちよつと待つて、うーん、ライブ……ライブか」
女が悩んでいると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会つたことありませんか？」

と少女は言つた。

「うまいなあ。久しぶりに、こっちに帰つてきたから、それはないかな」

「わー、どつりでカッコイイ」

「まあ暇だし、いいか……高校生？」

「チュウニです。わーい、それじゃ、中に入つてきてください」

「若いねえ」

と言つて女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。公民館の中は学生でこった返していた。

「えーと何だっけ隆くんだけ？　ちよっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すこともなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言っただけの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言っただけから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！　これっきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ　、学生でこの曲知らない人いないよ。後半、オリジナルの曲持ってくるんだけど、時間余りそうさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言った。

「だから知らないから、歌えませんか……」

少年はそう言っただけで、意味のないやりとりで嫌気がさしたのか、ステージの右端にぼつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。

「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらったのに使えないよね……」

少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのトランプ柄のティシャツを着込み、チエックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで尻はつり上がり、身

長は相当低かった。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。

「わからなくてもいいからさ、適当に合わせてよ。開始早々これじや遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、目の前にあった楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こっちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやってる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじゃねえ、義理で二千元も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていたが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけつとだろ！」

ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこっちの台詞だよ。おまえがなにさまかってんだよ！」

二人は押し合い、床にあったコード類が散らばった。

ドラムの神経質そうな男は、ドラムスローンからやっと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おいみんな！ 特にこの男目当てで来てる女子帰れ！ ガキと高校生に言ってるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないというように、顔をステージから背けて立つ女に目がまつた。

(こいつも俺と同じか……こうなったら何もかも壊れてしまえ)

少年はマイクを引つつかみ、

「そのギンガムチエツクの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、
女は（？）自らを指さした。

「そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲を
ささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「おまえもう帰れよ、クソガキが！」
と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけれられないような、状態になった。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの
音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。
始めはただの爆音で、馬のいななくような音が、次第に整ってき
た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターを
ひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように
持った。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置
に戻っていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。

ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合った。
ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となって、少年の力強く芯が通った歌声に、導か
れていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入っていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げた。

その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆつくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちよつと隆君!？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モッズコートのポケットに手を突っ込んで、階段を下りる。

ステージのちよつと真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあつた。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のようなスタイルでウインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ!」

少年はバイクに向かって言った。

「かわいいバイク」

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにはいた。

「あ、さっきの女」

少年はそう言つて、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合った。

「歌うまいよね。題名聞かせて!」

「題名つて言つてもな……さっきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え? 即興で全部やったの? ウソだ! ギターの子とすごいコラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さっき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」
女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違うって言って、実は邦題があったりするんでしょ
う？」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これってナンパ？」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそっちが先！」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離した。

「俺は隆そっちは？」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペ
ダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿
の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーマヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して！」

女も慌ててそう言った。

モッズコートの方スナーを上げると、少年はバイクを走らせた。
鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響

いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が二人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手
を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑ってアクセルを回した。

素敵な片思い 1

羽柴良太は大声で、

「恭ちゃん起きて！ 新学期だよ！」
と、言った。

橋本恭介は耳元で聞こえる、騒音から逃れようと、布団の中に潜った。

「今日から学校行ってくつて、約束したよね」

良太は恭介の肩を揺さぶる。

「俺、やっぱり行かない……」

「恭ちゃん、嘘をついたりする人じゃないよね」

と、言つて、良太は布団をはがした。

「わかったから……」

「恭ちゃんが行かないなら、僕も学校休む」

恭介はやつと起き上がった。目をこすりながら、

「用意するから、下回つて」

と、恭介は言つて、部屋を出た。

橋本家は二階建てで、この部屋から出てすぐ右側には、外へと降りる勝手口があった。

良太はいつも勝手口から、この部屋まできている。

恭介の両親は引きこもりな息子を思つて、良太に定期的に電話をし、外に連れ出してほしいと頼むが、良太は言われなくとも、そうするつもりだった。

外で待っていると、恭介は出てきた。眩しそうにしている。

身長はとても高く、肥満とはいかなくとも肥満の子供くらいには太っている。

これといつて顔の特徴はないが、太い眉が柔らかい印象に不釣り合いである。

良太は恭介に比べると身長の高さは際立っている。

前髪は顔を隠し、陰気な印象を与えている。

「恭ちゃん、おはよう」

「お、おはよう良太君……」

それから二人は自転車で学校へと向かった。

高校は市内の外れにあつて、橋本家から自転車で二十分程度の距離だった。

ここ、鶴左市は海の幸、山の幸が豊富で、日本全国でも有数のリアス式海岸を備えている。県からは南東部に位置し、人口はおよそ七万人。そんな九州の田舎である。

良太はペダルを踏みながら思索した。

恭ちゃんをこれから、毎日学校に通わせるには、僕はどうすればいいんだろう……何か良い方法ないかな？ やっぱりあれしかないかな……でも、

半ば答えが出ているが、躊躇っているのだろう。

そんな良太を知ってか知らずか、恭介の表情は、学校に近づくにつれ強張っていく。

「大丈夫だって、僕らそんな目立つ存在じゃないし、案外みんな気にしないと思う」

「……」

二人は並走しながら話している。

「それよりさ、今期アニメって、できよくないよね……」

良太は恭介の緊張を、和らげようとしているが、効力はないようだ。

校門に差し掛かる頃には、恭介の緊張はピークに、達しようとしていた。

「俺、やっぱり帰る……」

恭介はブレーキをかけて、止まると言った。

「駄目だよ！」

慌てて良太も止まる。

行き交う生徒は、そんな二人を見て冷笑している。

そのとき、二人の横を、ギターを背負った女子生徒が通り過ぎていった。

身長は低く、まるでギターに押し潰されそうである。

良太は自転車を、恭介の横につけて、

「このままでいいの？」

と、ささやいた。

恭介は顔をしかめ、耐えるように、駐輪場へ向かった。

良太も後を追いかけた。

二人は三階の2-Fと書かれている、教室に入った。

恭介の足取りは、教室に入るまで重かった。

二人が扉を開けた瞬間、視線が集まったが、それも長くは続かず、意外と、あっさりとしたものだった。ただ、クラスの生徒からは、疎外されている感じではあった。

良太の席は窓際が一番後ろの席で、恭介はその前だった。

恭介はおずおずと席に腰を下ろすと顔を机に向けた。

「大丈夫？」

と、良太は声をかけたが、恭介は黙っていた。

しばらくすると担任がやってきて、ホームルームが始まった。

始業式の間、良太はクリスマスライブを思い出していた。

きっかけは朝方見かけた、山中樁だった。樁はライブ中ギターを担当していて、会場の騒ぎを収めた張本人だ。あのギター演奏がなければ、ライブは中断していたのかもしれない。

バンドをすれば、前の恭ちゃんに戻るかもしれない。

それほど、あの日のライブは、二人にとって刺激的だったのだ。ヴォーカルの人って確か、A組の人だったかな……あのとき正式なメンバーじゃない、みたいなこと言ってたし……。

とにかく良太は声をかけて、バンドに誘ってみようと考えた。

学校が終わると良太は、恭介に先に帰宅してもらい、校門近くで

A組の彼を待った。

しばらくすると彼はやってきた。

話しかけようとしているうちに、尾行するような形になった。

市民体育館で右に折れて、良太も慌てて追った。

距離を縮めた。

彼はバイクにまたがっていた。

「あの」

良太はおごそかに言った。

「クリスマスライブで、ヴォーカルをしてみましたよね。すごく歌上手なんです。僕、F組の羽柴良太と言います」

「で？ 何？」

「それでその……バンドのメンバー募集してまして、あの……お名前聞いてもよろしいですか？」

「バンド、おまえが……？ 俺は隆な」

「それでは改めてお願いします、隆君……一緒にやってくれませんか」

「わるい、アリエネエ……おまえ本気で言ってるそれ？ それより俺がバイクで、学校通学してること、ちくつたらゆるさんぞ」

と、言っていてしまった。

隆の突き放すような態度に、最後は何も言えない良太だった。

「間が悪かったのかな……」

良太はあきらめて、帰宅することにした。

机の棚や壁にはアニメグッズ、フィギュアや、ポスターなどがあつた。

整理された室内だったがそれら物が圧迫している。

良太は帰宅すると部屋にすぐこもり、パソコンの電源を入れて、ネットサーフィンを始めた。

ブラウザを起動させ、検索単語を入力する。「歌手」や「バンド」といった文字が並んでいくディスプレイを、真剣な眼差しで追いか

けている。

「なるほど、バンドをするにしても、僕はどんな楽器を演奏するんだろう」

最も大事なことを、忘れていた良太であった。

「それに、恭ちゃんは賛成してくれるの？」

ネガティブな思考に押され、溜め息がこぼれた。

僕は周りが見えてないって、昔の恭ちゃんにしかられてた……。

ともかく、普段アニメソングを聴いて過ごしているので、流行曲でも聴いてみようとして、「JPOP」と動画サイトで検索をかけた。

一番上にあつた動画を、良太はクリックした。

すると、女性アーティストの静止画が現れ、音楽が流れ出した。

クリスマスソングが流れている。

良太は曲を聴きながら、コメント欄に目がいく。

「だれだ？ SAYAの曲無断でアップしてるやつは、やめろ！」

「貴重な画像ネットに流すな」

「いまだきアニソンの曲を、ネットに流して注意する親切なやつがいるとはな」

「何がアニソンだ、おまえらがいるから、ジャケットの表面にキモイ絵が入ったんだよ。SAYAの画像は貴重なんだよ！」

コメント欄には罵詈雑言が飛び交い、收拾がつかないような状態になっていた。

それから良太は気になって、匿名掲示板で同様の記事を探したが、スレッドタイトルに「二次元と三次元の戦い」などと題しているものまである。

しばらく記事を見ている限りでは、SAYAという女性シンガーの、新曲ジャケットの表面に、アニメの絵を使っていた、ということらしい。

これだけなら何を大げさに、と感じるかもしれないが、そのSAYAというシンガーは日本で最も認知度が高い歌手で、そして音楽活動以外行っていない。テレビにもラジオにも雑誌にもでない、し

たがってファンはCDについている、ブックレットからしか彼女の姿を見ることはできない。つまりファンは、アルバムジャケットのアニメ挿し絵事態、気に入らないのである。

良太が掲示板を見ていると、祖母の夕食を呼ぶ声が聞こえたので、良太は部屋を出た。

夕食後しばらく、祖母と祖父とでとりとめもない団欒があった。

良太は恭介と同じ学区内になるために、両親とは離れて暮らしていた。

元来おばあちゃん子だった良太は、祖父母と暮らしていることに恥ずかしいや煩わしいといった、若者特有の感情は抱いていなかった。

夕食後、入浴を済ませ再びパソコンの前に座って、バンドのことを調べていった。

とにかく 隆君にヴォーカルを頼むにしても……最低でも後一人、メンバーが足りないよね……ギターとベースとドラム、僕はどんな楽器が向いてるんだろう……。

「よし、うだうだ考えてても何も始まらないよね」

と、良太は言ってキーボードをカタカタと叩いた。

「バンドメンバー募集します。メンバーになりたい方は僕、羽柴良太まで連絡してください。090-*****-*****」

それから文字をプリントアウトし、ブレザーのポケットにしまつと、ベットに横になった。

素敵な片思い 2

担任から掲示板利用の許可は下りたが、バンドメンバー募集という紙面を見て、以外そうに眉をひそめて言われたのだ。

「羽柴がバンドねえ……」

不謹慎だと思ったのか、担任は咳払いでごまかしていた。

良太は今日も恭介を、学校まで登校させることに苦労したのだ。担任が教室から出て行き、どつと疲れたように席に戻り腰を下ろした。

「良太君どうしたの？」

と、恭介は聞いてきたが、

「何でもないよ」

と、バンドの件を伏せる良太だった。

恭介は案外平気そうな表情をしているが、良太はこれがずっと続くとは思っていないのだろう。些細なきっかけで登校拒否に陥るものだ。

だがしかし、原因にいたっては星の数ほどありそうだが……。

午前の授業も終わり、良太は二階に下りて、職員室横の掲示板に、昨日のうちに作成したメンバー募集の紙切れを張った。

恭介はそんな良太を見て言った。

「良太君バンドするの？」

「まだやることがあるんだ」

良太は職員室前で、大木のように突っ立っている、恭介を置いて先に行く。恭介も無言で後を追った。

「早くしないと、お弁当食べる時間がなくなっちゃうね。僕、A組に用があるから、恭ちゃんは先に食べていいよ」

と、良太は言って階段を上がっている。

A組の前に到着し、良太はガラス戸から中を見渡している。そして隆を見つけると、やおら入室したのだ。

恭介は窓際に所在なげに立っている。

「あの、昨日はいきなりでした、ごめんなさい。今、大丈夫ですか？」

と、良太は言ったが、隆は歯牙にもかけていない。

机二つ並べた隆の向かい側で、弁当を食べている松尾淳一は、チラチラと隆を伺っているが……。

「僕たちのバンドの、ヴォーカルになつてくれませんか？ 一人足りてませんが……先ほど職員室に、張り紙をしてきたところです」

隆は顎を突き出し、はしを置いてから言った。

「俺、飯くつてんだけど……何おまえ？ 昨日言つたるバンドはしねえって」

「はい、でも……昨日は間が悪かったのかなって思ひまして……」

「今はどうだ？」

「とても悪いみたいです……」

「で、一応聞くが、おまえの他に誰がやんの？ おまえ楽器できんの？」

「えっと……僕その他には……」

そこで良太は、廊下に立っている恭介を指さして、

「恭ちゃんと、僕と……あの、言いくいんですけど、楽器はまだ、持ってません」

そこで、松尾がばつが悪そうに額に手を置いた。

「アリエネエ！ おまえおちよくってる？ 楽器もいいけど、見た目どうにかしろよな、なんだよその前髪、素材悪くねえんだから、努力くらいしろ、話はそれからだ！」

「はあ……見た目ですか……」

「勘違いすんなよ、俺は松尾みたいに偏見ないからな、とにかくバンドはやらない。じゃ、そういういことで」

隆はそう言つて片手をひらひらと上げた。

良太は仕方なく、引き下がり教室を出て行く。

そのとき、昼休みが終わりを告げるチャイムが鳴った。

「ごめん恭ちゃん」

良太は廊下に出て恭介に、拝むように謝った。

学校帰り恭介の家に、良太は立ち寄った。

恭介は言葉少ない良太を心配していたが、寡黙な性格から気の利いたことは言えなかった。

良太は椅子の背もたれを逆にして座っている。

恭介はベツトに腰掛けていた。

「ねえ、僕たちつてさ、外見とか気にしたことなかったよね……髪型とか、服装とか、今まで普通にしてたつもりだったけど、普通の基準を知らない僕は、やっぱりただのオタクなのかな」

恭介は静かに聞いている。

「なんだか空回りしてる。ごめんね恭ちゃん愚痴って……」

「いいよ、俺気にしないから」

良太はしばらく目を瞑り黙り込んでいたが、家庭用ゲーム機を取り出して電源をつけて、

「だって、おもしろいもんね。アニメやゲームって」

と言つて微笑した。

恭介は隣に座り直してコントローラーを握った。

それから二人はしばらくゲームに没頭した。

「やったねブイ」

ゲーム画面上では良太のキャラクターが屹立し、恭介のキャラクターが倒れ込んでいる。

良太はゲームで勝つたのだが、現実でもポーズを決めている。そのブイサインはちょっといや、かなりぶっかこうである。

「恭ちゃん、明日はちゃんと起きてね」

恭介は黙つてうなずいた。

そろそろ夕食時でもあるので、良太はきりのいいところでゲームを終わらせ、ゲーム機を直した。

「また明日来るよ」

「うん……」

空は茜色に染まっている。

良太を勝手口まで送る恭介は、おずおずと言った。

「良太くん、バンド本気ですか?」

「わからない、恭ちゃんはどう思う?」

恭介が質問を質問で返されて、答えに窮していると、

「中学の頃はいじめられていつも恭ちゃんに助けてもらったでしょう。でも高校生になって、恭ちゃんの欠席が増えて、どんどん性格が変わって……昔の恭ちゃんは、とても静かだったけど、どっしりしてたと思う。だからこのままじゃいけないって、でも僕何もできなくて……あのときチケット押し売りされてライブいってさ、隆君の歌声を聴いたときにこれしかないって感じたんだ。だから僕決めたよ、バンドをするって! 今度は僕が恭ちゃんを助ける番だね」

と、良太は言っつて肩を下げた。

「バンドということを思いついたのは始業式の前日なんだよね」

「あのおれ」

と、恭介が言ったがそのときにはもう、良太は踵を返していた。

いちごの気持ち

山中椿は、夢見後心地だった。

ふらふらする足取りで、自室にある冷蔵庫を開けると、月とうさぎが描かれている箱の中からプリンを取り出した。プリンの他にも和菓子や洋菓子が幾つかあった。

机の横には鏡台があつて、鏡と向かい合うようにプリンを食している。むしゃむしゃと。

時折体が震えている。それは口を動かす合間に左手で、エアギタ―さながら指を動かしているからである。

ふだん物事を深く捕らえる傾向にある椿だが、朝のいつときはこつちやうやうって思考が奪われている。これは山中椿が停止している時間であつて、決して素ではない。

山中椿の親友である、隆がこの痴態を見れば、ニヤリとすることだろう。

今は、故合つて二人は口を聞いていない。

食べ終わる頃には意識も目覚めており、椿はまばたきをすると、机に向かった。

「私の足長おじさんへ」

という出だしで手紙を書き出したのだ。

手紙を書き終えると、丁寧に三つ折りにして、かわいらしい柄の封筒に収めた。

それをバッグに入れてから、椿は扉を開けた。

台所にはテーブルに突つ伏した母が、椿に気づいて、

「椿ちゃんおはよう、母さんまた、負けちゃった」

と、言った。

母は、上品そうな顔立ちではあるが、所々白髪があつてやつれて見えた。

椿はそんな母を無視し、洗面台に向かい歯磨きをした。

およそ一年前、椿は家庭内別居を始めた。

今では母子が、話をするこゝとすら珍しいのである。

ギャンブル依存症の母を何とか改心させようとしていた椿も、母が自分の机の中をあさっている姿を見て匙を投げた。

椿は孤独を知っていた。

どうしても気持ち落ち込みやりきれない日は、ただ部屋に閉じこもりがむしゃらにギターをひいた。そうすると自然に落ち着くのだ。

物心ついたときにはギターをさわっていた。

雑然とした物置に、幼い椿が初めて演奏した、ギターがあった。

椿が幼いころ、両親は離婚した。

父が最後に残したものは、そのクラシックギターだった。

決して開かれることのないその部屋を通り過ぎるとき、椿はほこりの被ったギター、その一角を見入ってしまうのだ。

用意が終わると、椿は家を出た。その間、母を見ようともしなかった。

背には体と不釣り合いな、ギターを背負っていた。

県営住宅から学校まで、徒歩で十分程の距離で、椿はその日の気分によって自転車通学と徒歩通学と変えていた。

道路を挟んでなかえ川が横たわり、橋を越えて遊歩道を通って道路を右に折れると校門から近い交差点が見えてくる。

教室に着くまで誰一人挨拶を交わすことなく、席についてからも松尾一人がすれ違いざまに、「おはよっす！」と声をかけたくらいだった。

ホームルームが終わると担任に呼ばれた。

それは保護者の承諾が必要な、提出物が出ていないせいだった。

担任の村山は、

「昼休み先生の所に来るように」

と、言った。

午前の授業が終わり、椿は担任の言いつけ通りに、職員室に向かった。

廊下を歩いていると、掲示板に目が留まった。バンドメンバー募集という掲示物だった。

クリスマスライブの後、椿はそれまでバンドの練習、ギターの上達のために何とか耐えてきた、メンバーの質の悪さ、いい加減さに我慢できず、あのバンドを抜けたのだ。

そこでこのメンバー募集は渡りに船だった。

同じ学校の人なら何かと便利かもしれない。

椿は携帯のメモリーに、羽柴良太の番号を記憶させた。

溜め息をついてから、良太は首を横に振った。

「今日も駄目だった……隆君たちと僕たちとじゃ、何だか住んでる世界が、違ってみたいだよ……」

良太は恭介をうらめしそうに見つめて言った。

「世界……」

「今のままじゃ駄目だってそう思ったんだよこんなオタク！」

「バンドと関係」

「意地になつてきたかもしれない。けどさ、ダサイよりカッコイイ方がいいよね？ もてないより、もてるほうがいいよね……僕たちこれじゃ駄目だ！」

良太は話しながら興奮している。

「ライブのときの隆君、恭ちゃんも見たでしょう。あのときの歌を聴いて、僕の中に何かが駆け巡った……そんな気がするんだ」

「俺、音楽詳しくないけど、良太君の言ってることわかる」

「ごめんね、八つ当たりして」

良太はそう言って教室へと入っていった。

恭介も後に続いた。

二人が弁当を広げているとき、良太の携帯電話が鳴った。

恭介は良太の表情が、ころころと変わるさまを見逃さなかった。

電話が終わると良太は喜び勇んで言った。

「恭ちゃん、バンドの後一人が決まったかも！」

待ち合わせ場所は、学校からも近い、遊歩道沿いの噴水のある公園だった。

二人は落ち着きなく辺りを見回している。

学校が終わると、恭介を引っ張るように連れてきた良太だった。

恭介は芝の上に立ち空を眺めている。快晴である。

良太はにこにこしている。

二人が立っている後ろから、彼女はやってきた。

「もしかして、あなたが羽柴良太？」

良太が振り返り、恭介も振り返った。

「はい。僕が羽柴良太です」

「じゃあ、あなたが募集かけのたのね、あたしは山中椿」

恭介は振り返ってすぐに、ロボットののような動きでぎこちなく固まった。

「はい、山中さんですよ。A組の」

「知ってるんなら話は早い。あたしは」

後ろのギターを指さして、

「ギター希望かな、そっちは？」

「えっと……非常に言いにくいんですけど……楽器はまだ持ってません……」

良太はそう言っつて、引きつった顔で恭介を伺った。

まさか、あの山中椿が来るなんて、思っても見なかったのである。

それは恭介も同様だろう。

「え？ 誰かに貸したとか？ 壊れたとか？」

「いえ、全くの初心者です」

椿は目をすつと細め、腕を組んだ。

「あなたたちからかかっているの？ 募集じゃなくて、仲良くバンドしましょうでしょうそれは！」

「そうですよね……」

良太はたじたじである。恭介は助けしてくれそうもない。

「じゃあ、あなたたち、見た目通りのただの凸凹コンビのオタクじゃない」

「だから隆君も、とりあつてくれななんだね」

ぼそりと良太が言った一言に椿は反応した。

「何、あなたたちって隆の知り合い？」

「知り合いというか、ヴォーカルになつてもらいたくて……毎日誘つてるんですけど、断られ続けてて、見た目からなおしてこい、話はそれからだつて言われました」

「隆がそう言ったのね！」

椿は腕を組んだまま、勢いよく言った。

「あの、本当にご迷惑かけました……僕たち出直してきます」

良太がそう言うと、

「待ちなさい！ まだ話は終わってない、凸凹コンビ！」

二人は肩を震わせた。

「デブは遊歩道を走る！ チビはあたしについてくる！」

恭介は、ぎこちなく首を回し一度椿を見てから、

「はいっ！」

と言つて、走り出した。

「あの、どこにいくんですか？」

と、良太は言ったが聞き入れてもらえず、先に歩き出した椿の後ろを追った。

椿は住宅に寄つて、自転車に乗り換えた。

徒歩で付いてきていた良太は、それからは走り変わった。

国道沿いにいって、二人はコスモスタウンフリーモール、市内の中心部へと入つたのだが言わずもがな、良太は汗だくである。

暖房の効いたきれいな室内、奥にはソファがあつて、入り口からすぐ近くにはカウンターがあつた。

椿は良太を無理矢理室内へと引つ張りこんでから、カウンターに立つ男に、

「ゆかりちゃんいる？」

と言った。

「椿ちゃん、今日はどうする」

と、男は言いつつも、顔だけ振り返り奥にいる女性を見た。

それに気づいた、女性は椿に向かって手を振って合図をする。

「うーん、あたしじゃないんだ。今日はこいつの髪を、どうにかしてほしいのよ」

生まれて初めての美容院で、良太は緊張している。

「どんなふうにする？」

男は良太の厚ぼったい髪を見て言った。

「とにかく、かっこよく 無理だわ。かわいくしてくれれば」

男が良太の髪をかき上げると、

「あ、ごめ、眉もしてあげて、サービスで」

と、椿は言った。

「うちはそんなサービスやってないんだけどな、それじゃ少し待っててね」

男はそう言つて、奥へといった。

「良太、あたしこれから用事あるから、帰らなきゃだけど、逃げたりしたら、メンバーになってあげないわよ」

椿は、入り口に手をかけ振り返りながら言った。

「え、じゃ、じゃあ！ 一緒にやってくれるんですね！」

と、良太が言った。

「まあ、あなたたち次第だわ、隆を引き入れるのは難しいわよ」

「僕、がんばりますから！」

「それじゃあね、走ってるやつの方もよろしく」

椿は出ていった。

恭介は走っていた。体は汗まみれになり、呼吸も荒くなるが足を

止めなかった。

今まで、ただ見ていただけの存在の山中樁と、話をする事ができたのだ。

それがかなった今、走ることに何の苦労があるというのだろう。一歩一歩進むたびに、思考がくつきりと浮かび上がってくる。今までの怠惰な自分を呪った。

こんなことなら、痩せておくんだった。今さら、そう思っても遅いが、それでも完全にあきらめていた事柄に、ほんの少しだけ希望が見えた。

夕焼け色に染まる公園　良太君は何をしているんだろう……。恭介が遊歩道の入り口を迂回しようとし、顔を上げたそのとき、人がいたので、避けようと体を動かして走る。

ちようど逆光になり辺りがよく見えない。

「恭ちゃん！」

驚いて恭介は立ち止まり振り返る。

そこには良太が立っていた。

まゆ毛を細く整え、長すぎた前髪を切り、短く無造作にまとめたその愛らしい容姿は、童顔な良太にとてもよく似合っていて、同一人物とは思えなかった。

「良太君？」

「そうだよ、わからなかった？」

恭介は傍らにいくとまじまじと見た。

「俺、驚いた。本当に良太君だ」

「終わって鏡を見たとき、僕もびっくりだよ、ねえ似合ってるかな？」

「う、うん、すごくそのいいと思う俺」

良太はにつこり笑うとブイサインを作って

「恭ちゃんやったね、ブイ」

以前と同じオタク的動作なのだが、良太の外見が変わったことにより、とてもよくにあった。

恭介は口をポカンと開けた。

「あのね、恭ちゃんもバンド一緒してくれるよね。山中さん入ってくれるって」

恭介は良太をじつと見つめて、

「俺も……。やりたい」

と、言った。

「ほんとのほんとに？」

良太はつぶやくように言った。

「俺もやる！」

と、違和感のある大声で恭介は答えた。

「よかった……。撲う……。恭ちゃんがいやだっていったらもう……。」

それから二人は帰るべく並んで歩き出したわけだが、どことなく恭介はよそよそしかった。

B e m y b a b y

明け方、携帯電話が鳴った。二度、三度と呼び出し音が続く。隆は寝惚けて携帯を投げつけ、壁に当たる。

いまどきの高校生は着信音を、デフォルトの状態でする輩は少ない。い。

そのためか、ピピピというやかましい音は妙に家中に響いた。今日こそは無視をしてやる。

隆は、「ああ」と声を漏らした。

こんなやりとりがここ数日続いていた。

毎日決まったような時間に、こうやって起こされてしまうのである。

隆は携帯電話を取って通話ボタンを押した。

「真紀、おまえさ、今何時か知ってる？」

と、言った。

「どうしてわたしってわかったの？」

受話器からは、真紀の声が返ってきた。

「おまえしかいないだろ！ じゃそういうことで」

「ちよっと待ってちよっと待って」

こうやって結局隆は眠れぬまま、学校へと行くのである。

隆が、切ろうとするたびに、ちよっと待ってちよっと待ってと繰り返すのだ。

ようやく話も終わるころ真紀は、

「今日も学校よね、いつてらっしゃい」

と、まるで自分がモーニングコールでも、しているように、しめくくるのだ。

携帯電話を鞆にしまうと、アンティークなレコードプレイヤーに、針を落として音楽を流す。六十年代のロックが流れている。その間、着替えを終わらせると、隆は居間に出た。

「お兄ちゃん、誰といつつも話よるん？」

と、妹の恵は朝食を食べながら言った。

二つに結んだ髪の毛が揺れている。

「別にだれでもいいだろうが、おまえに関係ねえ」

「もしかしてさ、ライブのとき二人で逃げた、女の人じゃないん？」

隆も座り、朝食を食べる。

「メグな、受け付けしよったやろ、あの人誘った張本人なんよ」

「アリエネエおまえか、一般人引き入れたやつは」

「あの日、椿さんと仲直りした？」

「いや……」

妹は肩を落とした。

「三人でせっかく計画練ったのに……おにいちゃんのバカ」

と、言つて、恵は立ち上がった。

「なんだ計画つて、俺聞いてねえよ」

「知らないのは、おにいちゃんだけ」

それから妹は、浴室の方へ歯磨きをしに向かった。

隆は（？）で朝食を食べ上げると自室に戻った。

しばらく音楽に耳をかたむけていた。

すると用意を終えた恵がやってきて、

「お母さん夜勤明けで、今寝とるけんな」

と言つて、恵はどたばたと足音を立て学校へ向かった。

隆はゆっくりと浴室に続く扉を開けると、泥棒のような足取りで

畳みを踏んだ。

奥には、母が寝ているのが見える。

壁際に乱雑に積み上げられていた、漫画本が揺れて落ちた。

すると、母はぬっと上半身だけ起こして、

「バタバタうるせえ！」

と、怒鳴つて隣にあった枕を投げつけた。

隆は思わず悲鳴をあげそうになったが、何とかこらえた。

洗面台についたときには、おもわず溜め息がもれた。

「あぶねえ、起こしたら殺される」

と、言つて、歯磨きを始めた。

顔を洗つてタオルで拭く。

「計画つて何だよ」

自室に戻つて用意を終えると玄関に向かった。

隆はバイクのエンジンをかけると、道路に走り出た。

形状はスクーターのようだが、イタリア製のバイクで排気量は百五十ccである。

学校では、原動機付き自転車の取得は校則で認められているが、自動二輪の免許は校則違反に当たる。

しかし、外見がスクーターにしか見えないことと、生徒の自由を重んじる校風、白紙の生徒手帳とこの学校では呼ばれているが基本的には校則が、あつてないような状態になっている。

そのまま学校まで乗っていくことはできないので、市民体育館にバイクを止めて、そこから徒歩で学校に向かった。

ちょうど交差点で松尾淳一が、にやにやと笑いながら隆に話しかけた。太い眉が印象的で横にも縦にも身体は大きい。

「よう、眠そうな顔してるなあ」

と、肩を回してきたので、

「暑苦しいぞ、おっさん」

と、隆がやり返す。

「俺のどこがおっさんだ？」

信号が青に変わり歩き出す。

「すべてが」

「じゃあおまえは、オカ」

「それ以上言つたらゆるさん！」

ちょうど、校門が見えてきて、横断歩道を二人は渡っている。

そのとき、山中樁がギターを背負つて歩いているのが二人の視界に入った。

松尾は、

「今日も一匹狼ですか、山中はほんとにクールだぜ、ま、そんな俺はアウトローだが」

と、椿を見て言った。

「おまえのどこがアウトローだよ」

チャイムが鳴ったので二人は急いで教室に向かった。

ホームルームが終わると、隆は担任の村山の下へいった。

「先生ビデオまだ？」

「悪いな。先生まだ、ダビングできてない。もうちょっと待て」

「ま、大事にしてくれるんなら、いつでもいいけど」

「しかし、よくあったな、何年も前の特番の映像」

「母さんが残してくれたから」

「そうか、先生悪いこと聞いた」

「いや、いいよ。それより、どうビデオ？」

「凄いなあ、まさにあのバンドの音楽だったよ。死して尚語り継がれる」

「そうそう、で、テープの音源で音悪い部分はコーラス入れたりね」

「六十年代のロックで、リーダー死んでいるから、本格的な再結成は無理だ。でも、先生泣いちゃったぞ」

「俺も俺も」

隆は興奮し、饒舌になりつつある。

そこでチャイムが鳴って、

担任は隆の肩を軽く叩いて、教室を出て行った。

昼休みになり、松尾と昼食を食べている。

「それ、メグちゃんの手作りだろ、いいな」

「別に普通だろ、何がいいんだ？」

「おまえってやつは、女心もとい、妹心のわからんやつだな」

「アリエネ弁当ごときで大げさだな」

「じゃあくれ」

松尾が隆の弁当に箸を落とそうとするが、隆はことごとく避けていた。

そんな隆を生温かい目で見ている松尾。

「ライブのとき、メグちゃんのサンタ姿、かわいかったぞ」

松尾がそう言うと、隆は思い出したように、

「おまえさ、恵と何かたくらんでたたる」

「何のことだか」

「椿のことだ」

「何のことだか」

そう言っていると、後ろから声がした。

「あの……隆さんバンドの件でお話があるんですけど、今いいですか？」

声だけを聞いて隆は、辛辣な表情を作った。

「おまえな、いい加減あきらめろよ」

と、振り返って一瞬だれと話しをしているか喪失した。

「僕、少しはましになりましたか？」

良太は恥ずかしそうに、はにかみながら言った。

「驚いた！ 食ってるもの吐きそう」

良太は笑い声を上げた。

「おまえさ、えっと、羽柴……良太だよな？」

「はい、そうです」

「すげえな、デブユーしたな！ 遅い高校デブユーおめでとうな。

まさかここまで変わるとは」

松尾も驚いている。

「あ、ありがとうございます！」

「前向きなオタクだなとは思ってたが、顔と内面が合致したな。ああ、俺、そこらへんにいる、趣味も情熱も何もないやつより、オタクの方がましだと思ってるから、安心しろ」

良太はまじまじと聴いている。

「みんなが好きと言ったら好き、ファッションにしる、音楽にしる。個性も何もねえからな……これからが大変だぞ、とにかく、自分の色を見つける、雑誌もみなきやな、しかしよくがんばった」

良太は涙ぐんでいる。

「じゃ、じゃあ、一緒にやってくれるんですね？」

「それとこれとは話が違う」

松尾が額に手を置いた。

「あの、約束が……」

「何？ 俺、おまえが変わったら話は聞くって言ったけど、入るとは言ってるねえ」

「そうでしたね……でも僕絶対にあきらめませんから」

「ま、でも、これからも気軽に話しかけれ、じゃあな」

良太は教室から出ていった。

土手の小道には、重そうな衣服を着込んでジョギングしている主婦。

その下、河川と青い草の斜面に挟まれた広場には、犬の散歩をする少女、

隆は学校が終わると、家には帰宅せず、近所の土手で川縁の石段に腰をかけて、首からノートをぶら下げている。

目を閉じ、息を吸い込み、歌い出した。

その歌声はこの光景に違和感を与えず、空気のように透明に流れていった。

時折、口を動かすのを止めたかと思えば、ノートに何かを書き込んでいた。

隆が父、宏大の影響で六十年代の音楽を好きになり、初めて歌ったのがこの場所だったのだ。それからというもの、毎日隆は歌った。宏大は、二歳の隆が英語でLucyと発し、歌い出したそのとき、大粒の涙を流して喜んだのだ。

幼い隆は抱きしめられながらも、

宏大に対して、こうすれば喜んでくれるんだ。と感じ、ますます歌にのめり込んでいった。

それと知らずに歌うという英才教育を受けていたのだ。

隆の家庭は、世間一般家庭とは少々異なっており、父、宏大は女装している姿が普通であったし、家事をこなしているのも当たり前であった。

母、涼子は市内にある病院で看護師長をしている。

夜勤明けで機嫌の悪い涼子に、優しく声をかけマッサージをしていた、宏大の姿がそこにはあった。

宏大が亡くなってからというもの、涼子と隆はよくいさかいを起こし親子喧嘩がたえなかった。

それは、当たり前前の母を父親として接してきたせいだろう。

事実隆は、宏大のことを母さんと呼んでいたし、涼子のことを父さんと呼んでいたのだから……。

この場所にくれば宏大の、あの後ろ姿をいつも思い出す。

エプロンをして、長い髪の毛を後ろでまとめたその様子を、隆は歌い終わると立ち上がった。

川面を見つめ、ふと羽柴良太のことを考えた。

放課後良太に廊下で出くわし、バンドの件を断り続けているのにも関わらず、元気よく「さよなら」と言ってきた。

不思議なやつだ、隆はそう思った。

夕食どきになると、涼子はのろのろと起きて来て、恵の作った料理に舌鼓を打つ。

ビールを飲んで、

「うめえ！」

「お母さんオヤジくさいからやめて」

「バカ息子、メグが言う長電話の相手はだれだ、女でもできたか？」

夕食に手をつけようとした隆に涼子が言った。

「友達友達」

「おまえ友達いたか？」

「失礼な」

「松尾君に椿ちゃん？」

「……」

「メグが言うには、ライブのとき女と逃げたらしいな、バカ息子」

涼子はニヤニヤと笑っている。

「恵！」

隆が一喝すると、

「だって、おにいちゃんが悪いんよ……」

と、言っただけで恵はテレビの方を向いた。

「おまえには関係ねえ」

「何イ」

涼子は怒鳴りながら隆の眉間に箸を直撃させる。

「もう、二人ともやめてよ。S A Y Aの曲が聴こえないから」

テレビは音楽番組をやっている、ランキングを行っていた。

女性アーティストの歌が流れている。

「おまえさ、食べるのやめてまで、見るもんじゃねえだろ」

「おにいちゃんと音楽の話したくない。S A Y Aは違うんよ！」

「おいバカ息子、妹の夢を壊すな。おまえと、宏大さんは音楽の話

になると、斜め上をいきすぎている」

「俺のことはいいけど、母さんのことけなすなよ！ ボケ！」

涼子はさっと立ち上がった。

「やめてよ！ もう……おねがいやけん」

多少の喧嘩ならとりあわない恵だが、さすがに止めに入った。

静まり返る居間、隆は夕食も早々に切り上げ部屋にこもった。

涼子は仏頂面で一升瓶の焼酎をグラスにくむ。

恵は番組が終わると食器を片付け始め、台所から洗い物をする音が寂しく響いた。

いつもの時間に真紀から電話がかかったが、隆は今までのように、

放置することもなくすぐに出た。

そして隆は、夢うつつの中、なぜ宏大が死んでしまったのか、どうして歌が好きなのかと、いったことを淡々と真紀に聞かせた。

その日は一言も真紀は「ちょっと待ってちょっと待って」とは言わなかった。

今夜は一人かい？

小城舞は都内にあるマンションのエレベーターの中で、茜色に染まる空を見上げて、溜め息をついた。

最上階でエレベーターは止まると、ホールにあった豪華な飾りをいともせずに、軽快な足取りで歩いていった。

紺色のスーツに眼鏡をかけ、ワンリングスカットの髪を耳にかけ

る。
扉の前に立つとワイヤレス送信機を使って、施錠を解除した。

舞は靴を脱ぐとすたすたと、リビングまでいって革張りのソファに、携帯電話を握りしめて眠る真紀を見て、深い溜め息をついた。

「真紀さん、起きてください！」

真紀はうなづいて寝返りを打つ。

「今、何時だと思ってるんですか！ 地元に戻って、自堕落なところが少しは直ると思っただんですが……全く変わっていませんね」

舞は真紀の肩を揺する、そのとき携帯電話が床に落ちた。

それを拾って、着信履歴を眺めてから言った。

「今日も例の少年と話をしていたんですね。こんなに長い時間」

真紀は薄めを開け、それから驚いたように手を伸ばし、携帯電話を奪取した。

「ちよつと、もう、舞ちゃんやめてよ……それって、プライバシーの侵害っていうんだよ……ひどいよ……」

真紀は寝ぼけ眼をこすり、ソファに座り直して言った。

「それで、そろそろ仕事しませんか？」

「私は社長令嬢だから、仕事なんてしなくていいし」

そんなことを言う真紀を見て、舞は軽い笑い声を上げた。

「社会的に迫害されそうなの、恋愛をしている真紀さん」

舞はそう言いながらソファに腰をかけた。

「何それ、恋愛じゃないよ」

「では何ですか？」

「友達？ いつもはね、私がとんでもない時間に電話をかけちゃうから、怒るのね。でも、今日は違った」

「ちなみに何時くらいにかけているんですか？」

「朝の四時くらい」

「普通怒るでしょう」

舞はそう言ってからひとしきり笑った。

「でもね。今日は何だかね。とてもシリアスな話をしたんだ。どうして歌い出したとか、母親についてだとかね」

真紀は誇らしげに言った。

「真紀さんが言っていた。その場で驚くようなメロディを紡ぎ上げ、それをとんでもない美声で歌いあげたっていう、彼の話ですよね？」
真紀はうなずいた。

「私はそんな妄想めいた話は信じられません。そもそも真紀さんにはそのとき、仕事のストレスというフィルターがかかってましたしね」

「信じてよー！」

「はいはい。そもそも地元へ里帰りを進めた私が、そのときの真紀さんの精神状態を一番よく知っていますから、それで、少しはおちつきましたか？」

真紀は黙って、唇を噛んでいる。

「もうすぐですよ、契約が切り替わる日まで……」

舞は柔和に言った。

「わかってるから、やらないと駄目だって……大丈夫だから……」

真紀は目を閉じて言った。

「そろそろ、着替えましょうか。顔を洗ったり、朝食？ 夕食？ を食べたりしないと、いけませんしね」

そう言っ舞はキッチンへ向かったが、真紀は慌てて声をかけた。

「あの、舞ちゃん……わたしが明日また、地元へ帰るって言っても怒らない？」

舞は驚いて振り返り、

「重傷ですね……彼、そんなに凄かったんですか？ 私には到底信じられませんか。プロデュースでもしてみますか？ 真紀さんの社長令嬢としての資金で」

と言つて、舞は拳を丸め口に当てるとクスリと笑った。

「金持ちの道楽ですから」

真紀は起き上がり浴室に向かった。

コンビニエンスストアの硝子の壁を見ては、雑誌に目を通す。

そんなことをかれこれ、一時間ほど良太は続けていた。

椿に美容院に連れていかれて、容姿が変わってからというものの、いまだに鏡に映る自分を見ると、どことなく気恥ずかしさを感じた。隆に雑誌を読めと言われ、次の日噴水公園で椿にも、同じようなことを言われた良太だったが、パラパラとページをめくりながら、一体何が良くてどれが悪いのかわからないのだ。雑誌にしても、ストリート系のファッションや、モデルばかりが写っている、ブランド志向な服が多数載っている雑誌もある。

良太はそんな中でも、同じような年齢の子たちが多く映って、趣味や年齢が記載されている本を取ると、レジに向かった。

良太にはまた一つ小さな悩みが生まれた。

恭介の態度があれ以降、よそよそしいのだ。

毎朝向かいにいくとすでに起きているし、帰りはいつも二人で教室から出ていたのに、校門を少し過ぎた所で待っていた。

そんなことを考えながら、家路についていると、後ろから声がした。

「いきなりごめん。高校どこ？」

良太は横にやってきた女子二人に見覚えはなかった。

「わたしたちと友達にならない？」

「え？ 僕のことですか？」

「カワイイ僕って、ねえ佐伯、僕とか言ってるこの子」

二人組の女子は、髪の毛を染めてスカートは短かった。

佐伯と言った女子は良太と同じ年くらいに見えたが、もう一人はその子からすれば大人っぽく見えた。

「あたしたちもコンビニいたんだけど、すっごいカワイイ子いるなって、追いかけてきたんだよね」

良太は唇を震わせながら、

「かわいいって僕のことですか？」

女子二人はあいづちを打った。

それを横目で見ると、良太は駆けだした。

女子に目もくれずに、走った。

呼吸は荒くなり、緊張で体が浮いているような感覚だった。

そのまま家にたどりつくと、自室までいっきに駆け込んだ。

良太はしばらく身動きができなかった。

運動靴を履いて、頬をパンパンと二回叩いた。

勝手口の扉を開けて、二階から階段を降りて、道路に出ると恭介は土手に向かった。

土手の小道につくと軽い準備運動を始めた。

それが終わると、走りだした。

時折すれ違う人たちは、まだ走り始めて間もない恭介を、温かく迎えてくれたようだ。

今もすれ違いざまに会釈をされ、それに答え軽く頭を下げた恭介だった。

次第に体が重くなり、汗が玉のように流れだす。

小道から河川の下の道を通って一周する、それを繰り返すのだ。

恭介は椿に言われこうやって、朝と夜に土手を走るようになったのだが、運動は苦手でも走ることは、自分に向いているなと感じたのである。

恭介は、人に何かを言われながらするよりも、淡々と作業を続け

るようなことに向いていた。

動いているときは何も考えなくてすむ。

しばらく走り、川縁の石段で休憩をとる。

恭介は良太と以前のように、接することができない、自分に腹を立てていた。

それだけ良太の見た目が変化したのだろうが、どうもうまく、口が回らなくなってしまうのだった。

臆病な自分。今まではそれが当たり前だった。椿と話をして、良太の外見が変化して、いかに自分が情けない存在か、理解できるようになっていた。

良太の前向きな性格を容姿が更に磨きをかけ、恭介には眩しく映った。

(とにかく今は何も考えるな)

恭介は立ち上がりジョギングを再開した。

すると、後ろの方から足音がし横に並んだ。

「疲れるね、走るって」

良太だった。暗くて顔はよく見えないが、

「よくここがわかったね、良太君」

「だって、恭ちゃんの家に行ったからね」

「そっか」

それから二人は並走した。

しばらく走っていた良太だったが、

「ごめ、僕には無理」

そう言っって弱音を吐くと、立ち止まった。

「ここで待ってるから」

恭介は片手を挙げる。

恭介が一周し戻ってくる頃には、良太は自動販売機でお茶を買って、自分はオレンジジュースを買った。

良太を待たせて悪いとも思ったが、すぐにやめてしまっってはジョギングの意味がないので、数周土手を回ることにした。

恭介は息を深く吸い込む、ゼゼエと喉が鳴った。肩に力が入り、フォームも崩れてきた。普段使っていない筋肉は悲鳴を上げている。良太は恭介が走ってきたので手を横に出した。しかし恭介にタッチする余裕はない。

一周、二周、三週目になって異変は訪れた。

ゼゼエと喉を鳴らしていた恭介はそれがヒューヒューと高音で鳴っていることに気づいた。歯を食いしばり、何とか街頭がある良太の傍らまでいくと、背を曲げた。

「おつかれさま」

良太は恭介にお茶を渡す。

返事をしない恭介。

「どうしたの？」

良太は恭介を覗き込んだ。顔を背けるがすぐに気づいた。息を吸い込むと同時に顔が震えているのだ。

「恭ちゃん！」

良太は慌てて背中をさするが何の効果も現さない。

「どうすれい？ 僕どうすればいい？」

「ベットの棚に、吸入気が……あるから……」

恭介は苦しそうに途切れ途切れ言った。

「それを持ってくればいいの？」

恭介は頷いた。

良太は全速力で恭介の家へと走った。

心配そうに恭介を見つめる良太。

今では呼吸も収まりベットに上がり腰掛けている。

良太は吸入器を取りに戻って、恭介が使うまで気が気ではなかった。

徐々に呼吸は整って、二人は部屋へと戻ってきたが、その間終始無言だった。

「俺、喘息持ちなんだ」

「いつからなの？ どうして教えてくれなかったの？」

矢継ぎ早に尋ねる良太。

「三歳からで小学校二年生くらいになるまで、まともに学校には行けなかった。いつも体育の時間になるの憂鬱で、マラソンのたびに見学しているとみんなに白い目で見られるし、それから、ぎりぎりまで耐えるようになって、誰にもこのことを話せなくなった」

恭介は良太と顔を合わせないようにしている。

「それで恭ちゃん欠席が増えたんだ……」

良太はシヨックだった。自分は恭介を救うと言いながらも、結局恭介の悩みすら訊き出すことができていなかったのだから……。

「俺、ごめん……」

「謝るのは僕の方だよ、恭ちゃんの苦しみを知らなかったから、静寂が二人を包んだ。」

「寝るのが怖い」

「どうして？ まさか寝ると喘息がでちゃうの？」

「夜中から朝方にかけてよく発作が起きるから」

「今日は僕が恭ちゃんが眠るまで起きてるから、安心して、発作も大丈夫だよきつと」

「良太君に悪い……」

「いいんだよ。僕恭ちゃんにやっと何かできる、その準備ができたと思うんだ。駄目だと言ってても無駄だよ」

良太はそう言って笑った。

「ゲームしよう」

恭介はそう言ってゲーム機を引っ張り出して、電源をつけた。

良太は横に座りコントローラーを握る。

恭介の中から良太へのよそよそしさは、もう感じられなかった。

恋の片道切符 1

隆はいつもの時間に、珍しく真紀から電話がかからなかったの
で、朝から携帯電話を操作している。

そんな姿を見て松尾は言った。

「今日は雨か……隆がらしくないことをしてる、それもこそごと
「うるせえ別にいいじゃねえか」

「悪いなんてたれもいってないぞ」

と、松尾は隆の様子を探った。どうやら今日は機嫌が悪いらしい。
隆は気分屋な所があり、小さなことに松尾もこだわらない主義な
ので、友達として二人はうまくいつているのだ。

二人は校門を抜けて生徒用玄関にさしかかる。

ちょうどそのとき山中椿が横を通り過ぎ、

「おはようっす！」と、松尾が元気よく挨拶をすると、
椿も軽く手を上げた。

その様子を横目で隆は見ても、話しかけようとはしなかった。

「土曜だし、どこか遊びにでも行くか？」

と、松尾が言ったので、隆は、

「まかせるわ」

と、やる気なく返した。

「じゃあ、フルハウスでも行くか」

「そうだな……久しぶりにマスターとセッションでもしますか」

隆はやっと普段の調子を取り戻し、教室に入った。

学校も終わり生徒たちは三々五々と帰宅して行く、

隆は携帯を片手に、松尾とともに校門を過ぎようとしている。

その少し後ろには良太が、話す機会を探りながらついて行く。椿
もこの後噴水公園集合をかけているので、良太と恭介からは多少距
離があったが、四人を視界に捕らえながら歩いている。

交差点に隆たちがさしかかると、隆の表情が驚きに変わっていった。

電信柱の横に真紀がサングラスをかけ、ライブのときのギンガムチエックの服装で隆を待っていた。

「今日は遊ぶのやめておくか」

と、松尾は言った。

そんな声も無視をして隆は小走り、横断歩道を渡ると真紀の腕をつかんで言った。

「おまえ、アリエネエよ。こんな所で何してんだよ」

「隆君を驚かそうと思って、待ってた」

「みんなに見られるだろ！」

と、隆が言っていると、真紀は至って普通に。

「見られて悪いようなことしてないし」

松尾、良太、恭介、椿、ライブに来た人は、当然そのインパクトのある格好ですぐにあのときのと合点がいっただろう。他のクラスの者たちや、違う学年の生徒まで奇異の眼差しを向けている。

良太は、今日もバンドの件で、隆に話しかけようとしたときに、

隆がちよつと走り出したので呆気にとられた。恭介も同様である。

椿は顔を背けるようにして、交差点を渡った。松尾はそんな椿を追いかけていく。

隆は、恥ずかしさのあまり興奮した様子で、

「いいから来い！」

と、言って、真紀を引つ張るように歩き出した。

道路を渡り、市民体育館横の間道に入った。

「ちよつと待って、そんなに急がないで、寝てないし、飛行機とタクシーでもつくたくた……どこかで」

「来るなら来るって言えよ！」

「来たよ」

「今言ってもおせえよ！ みんなに誤解されたな。ライブでナンパした女と付き合ってるって」

「どうでもいいじゃない、そんなこと。それより、疲れたし、おなかすいた」

隆は興奮を抑えるように半拍置いて、

「わかったよ、とりあえず予定通り、知り合いが働いている喫茶店に向かう、まったく……」

二人は、しばらく歩いて、モスグリーンの外壁でフルハウスという看板が出ている喫茶店に入った。

鈴の音が店内に流れると、六十代前後の白髪混じりのマスターが奥からやってきた。

「タカシじゃないか、元気にやってたかい」

「久しぶり、マスター」

隆はそう言っただけで空いている席に座った。

店内は広々としており、小さなステージまで設けられていた。

店のアンティークな調度品を引き立てるような音楽が流れている。

「雰囲気いいね、ここ」

真紀は辺りを見渡して言った。

「だろ。ま、親と仲がいいからな、ここのマスターは、それで俺もよく来てる」

「ステージがあるよ」

「夜になると、渋めな老人達が集まってライブやるんだよ。俺もたまに参加する」

「本当、隆君っているいろいろセンスいいよね。何人女の人泣かせたの？」

「おまえ俺が遊び人だと思ってるだろ」

「違うの？」

「ちょうど、マスターがやってきておしほりを置いた。」

そのままカウンターの中に入りそうだったので、

「マスター、なんか食べる物作って」

「おや、めずらしい。注文するのかい」

「今日はだべってるだけじゃないから」

隆は笑いながら言った。

「紹介して？」

真紀は不服そうに言った。

「こいつは真紀、年齢や詳しい住所は知らん。東京に住んでる、社長令嬢らしいよ」

と、隆は言った。

マスターは軽く笑いながら、

「もしかして、声でもかけたのかい？ めずらしいな、タカシもそんなことするんだな……しかし君も災難だったね。涼子の息子だから口が悪いからね、コイツは」

「隆君って遊び人じゃないんですか？」

真紀はおしぼりで手を拭きながら言った。

「とんでもない。椿ちゃん以外、女の子連れてきたことないからね」

と、マスターは真紀に言うてから隆の顔色見た。

「椿ちゃんって？」

「別に……」

「あれから長いね、隆」

と、マスターは言うて、隆が怒りだしそうに見つめてきたので、「おっと、私は何か作ってくるよ。聴きたい曲があったらリクエストして」

と、言うて奥へ向かった。

「ねえ、隆君、椿って誰？ どういう関係？」

「別に……クリスマスライブのときのギター担当のやつ」

隆が吐き捨てるように言うて、

「なるほどね、特別の人か」

真紀は揶揄するように言った。

「真紀、しつこいぞ」

「ごめんね、喧嘩の原因は何かとか、そんなことは聞かないから、そう言うて真紀はつくつくと笑ってから、壁にある写真を見つめた。

「これってもしかして、お母さん？ あ、お父さんって言った方がいいのかな？」

真紀は古い写真に写る、ちょっと目が鋭いポニーテールの女性を見て言った。

「それ涼子だよ。やな目つきしてやがる」

「似てる似てる。じゃあ、この横にいる人がお母さん？」

「うん、涼子が睨んでる人な」

そうこう言っているとマスターが軽食をお盆に乗せて、

「こんなものしか出来なくて、ごめんね」

と、言った。

「いえいえ、すごくおいしそうです。いただきます」

二人は料理に舌鼓を打った。

食事を終えしばらく談笑してから喫茶店を出た。

市民体育館まで歩いて、バイクに乗った。

真紀はギンガムチエックのヘルメットと自分をしきりに見て、

「なんかギラギラしてるよ」

と、楽しそうに言った。

「このメットがあつたから、真紀に反応したんだろうな」

隆はキックペダルを踏みながら言った。

何度もペダルを踏むが、エンジンはかからない。

「いつも調子悪いの？」

「これが当たり前、旧車だからな」

「きゆうしゃ？」

「だから、昔のバイクで、おまけに並行輸入だから、ウインカーなくとも違反じゃない」

「じゃあこれ、本物なんだ」

隆が蹴り疲れて、

「押しがけでもするか……」

と、言っているとエンジンはかかった。

真紀が後ろに腰掛けるのを確認して、バイクは走り出した。

大通りへ出て、学校を迂回するように駅に向かった。

しばらく市内をぐるりと回り、隆は自分の家を教えたりしながら、真紀が行きたいという場所のリクエストにも応じた。

それから隆は目的地に行くために海岸線に続く道路に出た。

潮の香りが漂う海辺は、手でつかめそうなほど近くだった。

ゴツゴツとした岩場にカモメが止まっている。

錆びたガードレールの横を、黄色い帽子を被った幼子たちが、規則正しく列を作って歩いている。

頭巾を被った老人は、海に向かって背伸びをしている。

バイクは軽快に走り隆は、およそ三十分おきにバイクを止めて、休憩を入れた。

バイクは、実際に乗っていると疲れる乗り物なのである。

港には小舟が止まっている。

「気持ちいい、最高！ 都会じゃちよつとこんなことできないよね」と、真紀はヘルメットを脱いで言った。

「俺は疲れるけどな」

隆はそう言っつて、バイクをスタンドで固定して、その上に横になるように座った。

「歌うようになったきっかけは何ですか？」

真紀はおもむろに言った。

「何だ、いきなり？」

「いいから答えて！」

「電話で言っただろう……」

「もう一度」

「土手だったかな、母さんが言うには二歳のときだったらしい。今思うと子供心にこうすれば親が喜ぶって思ったのかな」

と、隆が遠くを見て言った。

「なるほどね。ありがとう」

「おまえ、金持ちだろ、どうしてこんな田舎まで来て、俺といるん

だ？ 他にもいるだろ、友達とか家族とか」

隆がそう言うと、真紀は唇を噛んで言った。

「強いて言うなら、現実逃避かな。ほら、どうしようもないときってあるでしょう」

「今がそのときなのか？」

「もう、いいから行こう。時間は有限だよ」

「わかったよ」

隆がバイクに座り直して、真紀が後ろに乗るのを確認すると、バイクは走り出した。

バイクは海外沿いをしばらく走り、

瀬会い海岸公園という標識がある道に入って行った。

大きさを表すとグラウンドくらいはあるだろう、駐車場があつて、その奥にはログハウスが何軒か建っていた。

隆はバイクを止める。

「ついたぞ、今日の最終目的地」

と、言つてスタンドを固定すると、砂浜の方へ歩き出した。

「凄い、綺麗な海」

と、真紀も言つて、小走りに隆を追いかけた。

びっしりと白い砂が海岸にあつた。

隆は石段に腰を下ろした。その隣に真紀も腰掛ける。

夕日が水平線に落ちようとしている。

打ち寄せる波、キラキラと銀色に輝いている。

「一人でもたまに来る」

「椿ちゃんと？」

隆は真紀をにらみ、

「あいつとも来たことある」

「そっか。寒いけど、来た甲斐あつた、ありがとう」

「別に礼を言われるほどでもねえよ、遠いところからわざわざ来てるんだろ」

真紀は隆の横顔見て、笑った。

「質問！」

隆は嫌そうに眉を寄せた。

「詞を書くときはどんなときですか？」

「辛いことがあって、それがちよつと落ち着いたとき」

隆がそう言っているときに、真紀は隆のモッズコートのポケットに手を入れた。

「おい！」

と、隆が言ったが、無視をして話しを続けた。

「凄い悩みがあつて、それでも前に進まないと駄目だつてときは、隆君ならどうする？」

「だから、その悩みを打ち明けるよ」

「やだ、本質でいいから答えて」

「目を閉じて前に進むしかないだろ、回りが見えなくて、つまづくかもしれないけどな」

真紀は隆の横顔じつと見て、それから海を眺めた。

「この上に展望台あるけど、どうする、行くか？」

真紀は立ち上がり、

「行く行く！」

と、答えたのだ。

木立に囲まれた一角に細い通路があつて、その先に開けた場所があつた。

二人はゆつくりとそこを登つて行った。

木々の間には落ちた樁の花が地面に散乱している。

慰霊碑が高くそびえたち、隣にはお手洗いがあつた。

その奥に、コンクリートの建築物があつて、その下の階はカーテンが閉じきっていた。

隆は建物の横に取り付けられた、階段を上がる。

真紀も後ろからついてきている。

二階に上がると広さ的には四畳ほどの空間があつて、無骨な大きな双眼鏡が二つ並んで立っていた。

展望台から下は大海原が広がっている。所々に明かりがあつて、それがかろつじて船だと判別できた。

真紀は壁に手をつけて遠くを見ている。

「隆君つて本当は遊び人でしょう」

と、からかうように言った。

「そんなことねえって」

「そのルックスで、この雰囲気当てられて拒否反応を示す女の人、あまりいないと思うな、わたし」

「はいはい、ちょっと大人だと思つて、俺をからかつてんだろ」

「ちよつと待つて、私が興味半分で君に接していると思つてる？」

「じゃあ、どうして？　ちよつと歌がうまくて、面白いつて冷やかしてただけだろ」

すると真紀は隣にいた隆の手を握った。

「何する！」

隆はうわずつた声をあげた。

それでも真紀は離さない。

「いいから……変なことはしないから、お願いよ」

真紀は懇願するように言った。

「おまえ、変だぞ、落ち着きないし……現実逃避だつて言ったな、俺はおまえの餌か？」

「そんな隆君にまたまた、質問です！」

「やつぱりこいつおかしいよ。人の話聞いてねえし」

「今日わたしが急に來て、緊張していますか？」

「してねえよ、ボケ！」

隆が強く言つと、真紀は笑い声を上げた。

次第に夜が深くなる。辺りは薄暗くなり始めている。

「人生の参考になりました」

真紀はそう言つて隆の手を力強く握つた。

「何が人生だよ。大げさだな」

「あのさ、私のこと何があっても嫌いにならないでね」

隆は手をほどこうと引つ張ったが、真紀は離さなかった。

溜め息をついて隆は言った。

「何があるかしらねえけど、毎日電話かけてくるやつが、急に音沙汰なくなったら、心配する」

真紀はクスリと笑って、

「ありがとうね。これだけは言っておくけど、金持ちの道楽じゃないから、ここに来るのもね。若い男遊びに田舎の方が都合がいいとかね、そんなことないからね」

「おい！」

隆がいちいち反応するので真紀も面白がっている。

首を左肩に傾け、隆に寄り添うようにする真紀。

「置いて帰る！」

と、隆は踵を返したそのとき、

真紀は隆の背中に両手を回して抱きしめた。

放心しする隆。

「よし、このときのことを思い出して乗り越える。ごめんねありがとう！」

と、真紀は言って自分から離れた。

指で目元をすくいながら、

「ごめんね、いきなり。今日はほんっとうにありがとう！」

そのとき、隆は抱きしめられたということが頭の中で駆け巡り、

真紀の震えるような声に気づいてはやれなかった。

恋の片道切符 2

隆は松尾を避けるように、時間を少しだけ早め登校した。

おかげで松尾には会わずに教室に入ることができたが、

仏頂面でベランダから外を眺めていると、校庭からニヤニヤとした顔つきで階段を登ってくる松尾が見えた。

「めんどくせえ……いじられネタだろ……」

隆は席に戻って寝たふりをした。

昨日、時間がぎりぎりだったために、駅まで急いで戻った。

駅にはついたが、電車よりも車で空港まで行った方が早いとのことで、真紀はタクシーに乗った。

隆は抱きしめられたときの、衝撃を引きずって言葉少なめだった。ついたらメールをするといっていたので、朝携帯を確認したところ、「本当にいろいろごめんね、しばらくは自重するね」というメールの内容だった。

どう返事をしていいものかわからない隆は、携帯電話を時折開いては閉じていている。

「社会的に抹殺されそうな、恋愛に励んでいる隆、おはよう」

松尾は隆の首をつかんで言った。

「うるせえな」

「おまえはわかってない！」

「だからあいつは、金持ちで現実逃避をするために、田舎に時折逃げてくるんだって、こっちが地元らしいが、親も都会に住んでるから行くところねえんだろ」

「はいはい、普通は気をつかってスルーするんだろうが、俺はあえて聞こう！ 昨日は何をしていた？」

そこで隆はがばつと起き上がり、

「おまえな……自称アウトローだろ、そんな話に興味持たな」

「あ、都合が悪いときには俺のアウトローを認めてるよ」

「とにかく黙れ　な」

「で、話は変わるが、昨日はあのあとどこに行った？　フルハウスに行ったまでは知ってるから、そこはとばしていい」

松尾は隆の肩をバンバンと叩いて言った。

「話変わってねえし、どうして知ってるんだよ……」

「や、俺も行くこととしたから、後をつけたわけじゃないぞ」

「もうどうでもいい……ゼアイ行ったんだよ」

「ほー、あそこは綺麗な砂浜に展望台まであるな」

「だから、何ていうか、相談されたんだよ、これ、本当」

「じゃあどれが嘘だ？」

と、二人が話しているうちに担任の村山が入ってきて、

「先生！　俺今日、ヴェルヴェツタアンダーグラウンドの秘蔵ビデオ持ってきたよ」

と、松尾は言った。

「それはすごいな」

「今日は何もなし、適当に見てるわ」

隆はやる気なさそうに言った。

「先生こいつ！　音楽より女に走りそうです！」

「いちいち言うな」

隆と松尾は同じような趣味を持つ担任の村山と、日曜日は事前に打ち合わせて学校の視聴覚室に集まって、各自持ち寄ったビデオやレコードやCDなどを楽しんでいる。

松尾が筆頭になってこの同好会を、発足したのは言うまでもない。

村山はロックやパンクの歴史に詳しい。

一応は同好会という形をとっているが、毎週あるわけではない。視聴覚室に集まって、松尾がビデオを村山に渡す。

「いい加減バンドのヴォーカルとして、定着した方が曲作りも上手くいくだろうに」

村山は隆に言った。

「クリスマスライブのこと先生聞いたぞ」

「また松尾かよ……」

「おまえには才能がある」

村山はそう言いながら、ビデオデッキにテープをセットしている。「先生こいつまた誘われてるんですよ、えっとB組の羽柴だっけ？」
「いちいち報告するな」

「何か問題があるのか？ 羽柴良太だな、彼は最近変わったな。先生たちの中でも評判になつてたぞ」

「それ先生！ こいつのせいです！」

松尾は手を挙げておおげさに言った。

「それはまた、どうしてだ？」

「見た目から直してこい！ 話はそれからだ！」

松尾は隆の真似をして言った。

「アリエネエ、俺そんなやつじゃねえ」

「でも、悪くなったわけじゃない、先生よくわからないが、羽柴はパツとしたな」

笑いながら村山はそう言った。

「で、バンドには入るのか？」

村山は松尾が聞けないような肝心ことを隆に訊いた。

松尾はじつと隆を見ている。

「俺はもう人前では歌わない」

ぼそりと隆は言っ、

「隆が言う情熱ってやつは持つてると思うぜ！ 何せあそこまでして見せたんだからな」

「いいから先生ビデオ見よう」

と隆が言うとこれ以上追求するのも悪いと思ったのか、村山は再生ボタンを押した。

隆は学校を出ると一人で、フルハウスに向かった。

何だかわからないが、むしゃくしゃしてるのだった。

扉を開けるとマスターが嬉しそうに、

「二日連続で来るなんて珍しい。前は良く来てたが」

隆はカウンターに腰かけて、うつむいている。

「何かさ、マスターって周りのやつがみんな希薄に見えたときあった？」

「いきなり難しい質問だ、タカシ」

「どいつもこいつも同じような格好して、同じような考え方で、俺、そういうの見てるといやになるし、あれが好きだとか、これが好きだとか言っても結局は、そんなものかよみたいに……」

「若いなあ……タカシの言ってることは理解できる。でもな、人と違う価値観を持って、それを愛していない人が駄目だってわけじゃない、わかるかい？」

「どうしてだ？ 何度かバンド組んで、息苦しいっただらなかつた」

「それで喧嘩して辞めるって、椿ちゃんがいっつも困ってたな」

マスターは髭を触りながら笑っている。

「先が見えてるし無駄だから、気持ちさえあれば努力もするけど、それすらない」

「宏大が死んでしまっただけから、おまえも変わった。タカシはどうして歌う？ こんな質問もしばらく誰からもされていないだろう」

「どうしてかって言われたら……歌わずにはられないから、そうとしか答えられない」

「涼子は元気にしてるか？」

しめっぽくなつた雰囲気、変えるようにマスターは言った。

「毎日うるせえよ」

「おまえ、涼子に歌を聴かせたことあるか？」

「あいつにそんなのが、わかるわけがねえ」

「そう思ってるのはおまえだけかもしれんぞ、タカシ」

マスターは、そう言って、ちょうど客が入って来たので、対応に追われた。

接客が落ち着いたのを見計らって、隆はマスターに手を挙げてフルハウスを出た。

土手の石段に座り歌っていた隆だったが、どうにも調子がよくないのでしばらく川面を見つめていた。真紀から三度目のメールが鳴った。「怒ってる?」という内容だった。その前は「ごめんね」だった。携帯電話のメモリーのギンガムチェックという欄のボタンを押した。

暫くして電話は繋がる。

「もしもし、私真紀です」

と、受話気口から聞こえたので、

「おまえ、何度もしつげえよ、怒ってねえし今まで通りでいいから」と、隆が言うのと遠い声で、

「真紀さん、怒ってねえそうです。よかったですね」

「舞ちゃんちよっと待ってちよっと待って、勝手に電話取らないでよ」

雑音がして、

「ごめんね隆君、今は気にしなくていいから」

「だから、昨日はいろいろあったけど、怒ってねえし、今まで通りでいいから、おまえもあまり考えるなよ」

「ありがとう、私緊張してる」

「は? 昨日は会ってても普通だったろ」

「もう駄目、手とか震えてる」

「なにやっつてんだよキモイな……とにかく、そういうことだから、じゃな」

隆は電話が終わると瞳を閉じて、練習を再開した。今度は集中力が途切れることはなかった。

隆が帰宅するとテーブルには恵が作った料理が既に並んでいた。バッグを置いて、腰掛ける。

涼子は酒の肴を食べながらビールを飲んでいる。

恵は柳眉を上げて台拭きで涼子のこぼしたビールを拭いて、空咳をし、

「いただきます」

と、言った。

「いただきます」

隆もそう答えて夕食が始まった。

隆が箸を、動かそうとすると、

「バカ息子、フルハウス行ってたらしいな、電話あったぞ……たまにはあそこに顔だしてくれ、俺のかわりにな」

と、言っただけで涼子はビールを片手に豪快に笑っている。

「マスターなんか言ってたか？」

と、隆が言うと、

「たまには涼子も顔だしに來い！ 怒られたわ」

と涼子が言うと隆は小さく笑った。

「やけんメグがいったやん、今日はフルハウスでご飯食べようって」

「ここからだ遠いだろうが」

「メグも樂できるし、マスターと話してできるやん」

と、恵は口をとがらせて言った。

「來週行くか、しかしあの睨んでる写真どうにかならんの？」

と、隆が言うと、

「それ、俺のことじゃねえよな」

と、涼子が言っただけで箸が隆の眉間に直撃した。

俺から電話したのって初めてだよな……。

隆は入浴から出てトランクスいっちょうで、そんなことを考えていた。

涼子はビールから焼酎に切り替わっており、顔は赤くなっている。

恵はテレビを見ていた。

テレビ番組は歌番組をやっていた。それを必死に見つめる恵。

「おまえまた、こんなつまらんもの見てる」

と、隆が言う。と恵はキツと眉を寄せ恐ろしい形相で睨んだ。

隆は気おされ、

「わかった、黙るわ」

と、言った。

「初公開ですよ、それではSAYAさんの登場です」

と司会役の女性が言うと、

真っ黒いドレスに身を纏った、黒髪のスラッとしたSAYAが登場し女性と男性の司会者と向き合うように座った。

「動いてますよ、本物のSAYAですよ。写真と変わらず綺麗ですね」

と、司会役の男性が言うと、

「これは凄いことですよ。TV初公開ですね」

「生番組です。SAYAさんが私の隣にいます！」

司会者は代わる代わる、大げさに盛り立てる。

SAYAの後ろには何人もアーティストが控えている。

「本来なら、ここですぐに歌ってもらうのが、この番組の流れなんです、今日は少しお時間を取って、SAYAさんに質問したいと思います」

司会の男性は言った。

「歌うようになったきっかは？」

司会男性はそう言った。

SAYAはおずおずとマイクを持ち上げると、

「土手だったかな、母さんが言うには二歳のときだったらしい。今思うと子供心にこうすれば親が喜ぶって思ったのかな」

フレンドリーな話口調で言った。

「そうですね、二歳凄いですね！ それでは質問を変えます」

恵は画面に吸い付くように見ているので、隆が、テーブルにある食器類を流し台に運ぶ。「詞を書くときはどんなときですか？」

男性司会者から女性司会者に切り替わる。

「辛いことがあって、それがちよっと落ち着いたとき」

と、S A Y Aは言った。

「なるほどそうですね、そういつたときに世に出てくるような、素晴らしい作品が思いつくんですね」

「それでは質問を変えます」

男性司会者は、マイクを持ち直すように言って、更に、

「今日、この番組にでて、緊張していますか？」

そう続けた。

「してねえよ、ボケ！」

隆はテーブルにあった醤油差しを倒した。

それからテレビ画面を見つめて、

真つ黒いS A Y Aの格好やバックにいる他アーティストや、司会の二人が視覚から消えて、S A Y Aの顔、顎から上の部分だけがぼやけて見えた。

現実とは思えなかった。そこに映っているS A Y Aはまぎれもなく、昨日隆に抱きついた真紀だったのだ。

「オラ！ バカ息子テーブル拭きやがれ！」

と、涼子が怒鳴ろうとも聞こえてはいなかった。

舌打ちをして、涼子は布巾でテーブルをふいた。

司会の二人は真紀の言葉に呆気に取られて、ほんの少しテンポが遅れる。

「S A Y Aさんはジョークがうまいですね。ツッコミですか」

と、男性司会者が言うと、後ろに控えているアーティストから笑いが漏れた。

「それでは歌の方に入ってもらいましょう。S A Y Aさんよろしくお願いします」

女性司会者が言うとS A Y Aは立ち上がった。

S A Y Aは大勢観客が詰まった場内、はりぼてのセットを見渡した。

ゆっくりとした足どりで階段を登って、マイクがあるその場所ま

で行くと瞳を閉じた。

スタッフが早速カンペを出す。

「SAYAさんは閉じないでください」

と、一度目を開けてカンペを見てもSAYAはまた、目を閉じた。アーティストマネージャーである舞に、初めてだからあてぶり、口パクでいいと言われたがSAYAは、「初めだからこそ、それはできない」と断ったのだ。

バンドの演奏は始まった。

時間はコマ送りのように過ぎ、一秒ごとに心臓の鼓動が早鐘のように高まった。

大型スクリーンはSAYAを投影している。

今だ、とSAYAは口を広げて、目を開ける。

観客と視線が合い、バンドの音が何倍にも大きく聴こえた。

SAYAは伴奏が終わっても歌い出すことはできなかった。

体が石のように固まり目線まで凍りついたように動かない。

後ろを振り向いたとき、SAYAは何かとても大事なものが、こぼれ落ちたような気がした。

忘れていた震える息づかいが聴こえる。

観客から遠ざかるように、一步前へ踏み出した。

それからは驚くほど早かった。

SAYAはステージを走り、逃げ出したのだ。

恵は顔を苦しそうにしかめて、

「どうしよう……」

と、涙を流している。

隆は未だに現実ではないような気がして放心していた。

恵の泣き声で、我に返ると、

「大丈夫、あいつは逃げて、逃げ切れるような性格してねえから、元気だせメグ」

と、胸を押さえ言った。

涼子はその光景を着に酒をあおった。

奇妙な夜だった。

もう寝る時間だというのに、恵はニュース番組を見ていたし、隆はいつもならすでに部屋にひきこもってる時間なのに、時折、携帯をさわりながら、テレビ画面をチラチラと窺っている。

涼子は普段なら隆にちょっかいを出すというのに、静かに酒を飲んでいた。

音楽番組はあのと、CMが入って、SAYAの次に歌うアーティストが一曲多く歌っていた。

「メグ、そろそろ風呂に入れ」

と、涼子が優しく声をかけるが、聞いていない。

「隆、おまえもなんか言っつてやれ」

「恵……好きなときに入れ、おにいちゃんは今日はおまえの味方」と、隆が言つと、

「めずらしいこともあるな！ こりゃ明日は雪だな」

と、豪快に笑いながら酒をあおっている。

妹は泣きはらした目をこすり、浴室に向かう。

もう日も変わるうとしている。

するとそのとき、チャイムが鳴った。一回、二回と続けて、

隆は跳ね上がるように立ち上がると、

「俺が出る！」

と、言っつて玄関に向かった。

「こんな時間にどこのどいつだ、非常識なバカは！」

酔っている、涼子も玄関に向かおうとしたが、

隆が立ちほだけり、

「いいから、俺が行くつて！」

「一家の大黒柱は俺じゃ！」

揉み合いになっている。

三回目のチャイムが鳴った。

浴室に向かおうとした恵は、この騒ぎを聞きつけ、玄関に向かった。

隆と涼子は玄関でつかみ合いをしている。

そんな状況も無視をし、恵は玄関を開けた。

「待て！ 開けるんじゃないやねえ！」

と、隆が言った。

ガラガラガラと玄関は開いて、

「逃げて来ちゃった」

と、真つ黒い格好をしたSAYAが言った。

隆は頭を抱えるようにして、

「アリエネエ！」

と、言った。

恵は言葉も発することができないでいる。

「妹さん？ かわいい！」

と、真紀が言っ

「真紀、おまえ……何てことしたんだ……芸能人嫌いな俺でさえ、心臓が飛び出そうだぞ！」

隆は玄関であぐらをかいて座り込んでしまった。

涼子は、SAYAの服や髪を触って、

「ありや」

と、言った。

「ねえ、隆君、妹さん紹介してよ」

隆は頭をかきむしっている。

「ちくしょう！ だまされたよ俺！ 妹は恵でおまえの大ファン」

「ありがとうね、ごめんね、見たたよね……」

真紀は恵の頭を優しく撫でた。

それから涼子の方を向いて、

「本当に夜遅くにすみません……ここならばれることはまずないと、そう思っ

て来てしまいました。隆君とはお友達させてもらってます」

「まあ、色々ある。気にすんな」

と、涼子が肩に手をかけると、真紀は恵に抱きついて堰を切ったように泣き出した。隆は天井を見上げた。

真紀が落ちて着いて恵が初めて真紀に言ったことは、
「あの、サンタクロースって私だったんです。だから……初対面じゃないんです」

と、真紀は、合点がいった。

「ライブのね、隆君と私が知り合ったのは妹さんのおかげ？」

「世の中どうなってるんだ……」

隆は天井を仰ぐように言った。

「さて寝るか、おまえらも適当に……」

涼子はふらふらと、寝室に向かった。

「おまえどこで寝るんだ……」

真紀に向かって隆は言った。

「隆君と一緒に寝る。嘘」、

「おまえな……」

と、隆は言っ、立ち上がった。

「もう風呂入るな二人とも、涼子が寝たし……明日の朝入れ」

「うん、おにいちゃん、ありがとう」

と、恵は言った。

隆は部屋に向かって、真紀もそれに続いた。

恵は居間の押し入れから布団を一組引っ張り出して、隆が寝ている、隣に置いた。

それから自分の部屋に入って、布団を持ってきてその横に置いた。

「おい、メグ！」

と、隆が言ったが、恵は涼しい顔をしていた。

綺麗に三つ並んだ寝具の一番左に恵が入ると、その隣に真紀が入った。

「なんか夢みたいや……」

と、恵は言った。

しばらくして疲れていたのか、すぐに寝息がした。

隆はチラッと真紀の方を見て、

「大丈夫か？」

とぶっきらぼうに言つと、

真紀は、

「たぶん……ごめんね……本当に」

と、言った。

「今頃、自分のしでかしたことの大きさに気づいたんだろう。でも、おれんちつてな、常識とかそういうの全くないから、それに関しては気を使つな」

それから半拍置いて、

「おまえが逃げるなら、俺が前に進むから」

そう言つて隆が布団を肩にかけていると、真紀の腕が布団の中に入ってきて、手を握る。隆は、口を開きかけたが、何も言わなかった。

「おやすみなさい、それと隆君の言葉、代弁するように使つてごめん」

「最後に一つだけ訊かせてくれ、どうして逃げた？」

隆は背を向けたまま言った。

「隆君に会つて壁を感じたし、何より歌以外で自分が認められると思つと悔しくして」

「いいわけだろ？」

「ごめん、テレビに出るのが死ぬほどやだったの……」

「おまえ、今日ここに來て何度ごめんって言つたよ……」

隆はそう言つて振り返りさらに、

「俺が訊きたかつたのはおまえの本音。それが聞けたから、もう何も問題はない。おやすみな」

と、言った。

真紀は力強く隆の掌を握ると目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

ウレハ

2012年1月6日18時49分発行